

井筒俊彦著「意識と本質 - 精神的東洋を求めて - 」岩波文庫、岩波書店 1991年8月1日刊を読む

意識と本質 - 精神的東洋を求めて -

1. 有意味と無意味の問題を禅はどう考えるであろうか。言葉が本質的に——宿命的に——もつ意味というものの構造を禅はどう理解するであろうか。
2. 私がこのような形で問題を提起するのは、禅自身が言語の問題を徹底的に無意味性というパラドクシカルな形で提起するからである。言語の有意味的使用に対して、禅はまっこうから反抗し挑戦するかのごとくに見える。
3. 禅はその活動のあらゆる場において、無意味性という現象を重視する。「無意味」は禅の語録や公案集のいたるところに顔を出す。言語以前の行動の次元においても、禅は既に無意味性に満ちている。有名な禅者たちの特徴ある行動は、常識的観点から見ると、すべて、ほとんど例外なしに、無意味である。無意味でなければあたかも禅的行為ではないかのように彼らは振舞う。天龍和尚や俱胝和尚の一本指。何をどう尋ねられても、彼らは必ずただ一本の指を立てるのを常とした。無意味である。しかし、禅自体の中では、俱胝和尚のこの奇行は公案として扱われるほど重要視されてきた。して見ると、禅自体の見地からすれば、俱胝の一本指は有意味的行為であるに違いない。すなわち禅には禅の立場からする独特の有意味性の規準があるに違いない。常識的見地から見て無意味であるものを有意味に転成する、その規準とはどのようなものであろうか。
4. 身体的行動の領域を離れて言語行動の領域に入ると、禅の無意味性はもっとむき出しな、はげしい形で露呈される。「橋が流れている、川は流れない」とか「山が水上を歩いて行く」というような無意味な言辭が横行する、それは世界なのである。しかしこのような言葉の使い方は、常識的に言えば、言語的意味を言語そのものによって破壊する言語の自殺行為にほかならない。
5. 禅の最も禅らしい言語活動は問答という形をとって展開するが、問答形式では禅独特の無意味性が更に一段とむき出しになる。無数の例が語録や公案集にある。ある時、ある僧が趙州禅師に問うた、「如何なるか是れ祖師西来の意」。趙州答えて曰く「庭前の柏樹子！」祖師、達磨はどんな意図でわざわざインドから中国にやって来たのか、つまり仏法の最深の意義はどこにあるのか、と僧は問う。これに対して趙州は庭さきの木を指しつつ、ただぼつんと「柏の木！」と言った。「如何なるか是れ仏」(仏とはどんなものか、絶対者とは何か)という問いにたいして、洞山守初禅師は、唐突に「麻三斤！」(重さ三斤の亜麻)と言った、と伝えられている。全くわけがわからない。趙州の答えも、洞山の答えも、それぞれの問いにたいして、答えとしては意味をなさないのである。問いと答えの間に何の聯関もないからである。問いと答えの間に意味的聯関性がなければ對話は對話にならない。

6 . ディアログスとは一つのロゴスが二つに分れて展開していく形である。そこには一本の筋が通っていないなければならない。対話にならない対話は無意味である。そして意味が成立しなければ言語はコミュニケーションというその第一義的な機能を果せない。だからこそ、禅における言葉のやりとりは、大抵の場合、一瞬にして終了してしまう。ロゴスの線が続いて行かないから先に進みようがないのである。

7 . しかもなお、禅者は好んで問答する。問答は、古来、坐禅とならんで重要な精神修練の形式であり、悟りの深度を測る極めて有効な手段ですらあった。とすれば、問答する二人の禅者の間には何らかのコミュニケーションが成立しているはずである。日常的条件の下では無意味としか考えられないような言葉のやりとりが、現に問答している二人の禅者にとっては普通以上に有意味であるのでなければならない。このような場で成立する言語的意味とは何だろう。それが本論の主題である。

[コメント]

有意味と無意味の問題を禅ではどう考えるのか。ものごとの本質に迫ることは、イノベーションの促進に直結する。大いに議論すべしと考える。

- 2009年11月13日林明夫記 -